

福島原発事故被害から 健康と暮らしを守る会

会報 5号 2025.3.18



無念の悔しさや被害者の重みを背負った福島の叫び！ 福島から原発再稼働反対を！

鎮魂の日、14回目の3. 11を迎えました。この日のあの日は、88歳になる親類の送り人になりました。歳重ねるごとに、近親者や知人、友人が鬼籍に入っています。「忘れない3. 11」の空疎なタイトル文字が新聞紙面に躍っています。私たちには忘れたくとも忘れることは出来ない日です。怒り、憤怒、不平、不満、不信、嘘、疑念、悔恨、孤立、孤独、無念、欺瞞、寂寥感、焦燥感、閉塞感、無常感など、この間に体験した人々の物語は長きにわたりいまだ終わりを知りません。ふと亡き人々の言葉が甦ります。「原発事故さえなかったら」「助けることが出来なかったいのち」「も一度会いて一な」「家に帰りだがつたな」と地底からの声なき声が聞こえます。

国と東京電力は、今次第7次エネルギー基本計画で原発の最大活用を謳い、東京電力福島第1原発事故以降、明記してきた「可能な限り原発依存度を低減する」との表現を撤回し、原発を安定供給と脱炭素電源等を理由にして、再稼働、建て替え、次世代革新炉を建設できるようにしました。政府の原発回帰と最大限活用は、事故の反省と教訓を反故にした暴挙であり、フクシマを忘却の彼方に追いやる意思を明白にしたものです。巨大地震が頻繁に起き甚大な被害を齎している日本列島、人々と原発が共存できないことは、今なお続くフクシマ被害の全容によって証明しています。

国と電力資本は、福島事故原発と同型である女川原発を稼働、島根原発再稼働と続き、柏崎刈羽原発を再稼働しようとしています。国と東京電力は、東京電力所有の柏崎刈羽原発6. 7号機を再稼働することによって福島事故を終わらせ、原発回帰を本格的に軌道に乗せるつもりです。柏崎刈羽原発再稼働を巡り、新潟では知事選など各種選挙の大きな争点となり、知事は諮問機関の検証委員会をつぶし、国は、市民検証委員会に対抗して避難説明会を各地で開催、東電は同意なし核燃料の装填強行など熾烈な攻防が続いています。再稼働の是非は県民が決める県民署名は15万筆超が集まり条例を決める県議会の動向が焦点となっています。

国と東京電力は嘯きます。福島の復興なくして…、復興と廃炉の両立、福島復興のために残された東京電力…事故やトラブルの過小評価など、国と東京電力は、取り返しのつかない事故を起こしても誰一人責任を取りません。原子力災害による事故被害は渦中にあります。事故原因も定かではありません。廃炉の終わりも示しません。汚染水を海に流し続けても屁のカップです。東京電力が排出した汚染土の処理は国民に押しつけます。子どもたちの甲状腺がん発症と事故による被ばくとの関係も否定し、医療費減免措置も段階的に廃止しています。裁判では賠償金の過剰支払いや帰還を促す開き直る姿勢など、倫理的にも国や東京電力に原発を扱う、原発を動かす資格は到底ありません。再稼働反対は福島の課題です。無念の悔しさや被害者の重みを背負った福島の叫びです。

私たちは、福島原発事故から健康と暮らしを守る会をつくり活動しています。医療費の無料化継続と国の責任による健康手帳の交付、完全賠償を求めています。被害者のこころ、からだ、いのちの復興を果たす

ためにも脱原発は私たちの運動と不離一体です。福島の悲劇を二度と繰り返さないために、今こそ、福島から脱原発・再稼働反対の声を上げましょう。

2025年3月11日

福島原発事故から健康と暮らしを守る会事務局長 佐藤龍彦



福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会 第3回総会を開催

2024年11月9日、浪江町地域スポーツセンターで「福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会」第3回総会が、開催されました。県内外から会員、サポーター、新しい参加者も含めて30名が参加しました。オープニングでは日本音楽協会福島支部による歌3曲が披露され、原発下請け労働者への思いを歌った「むらさきつゆ草」の歌を作詞作曲した故小島力さんの娘さんで「守る会」の運営委員でもある坂口美日さんが歌ってくれました。



紺野則夫会長からは、今年ノーベル平和賞受賞した「被団協」代表委員の蓑牧智之さんと夏に広島でお会いしたエピソードも交えながら、被爆者・被爆二世とも連帯して運動を前進させたいとの挨拶がありました。そして来賓挨拶の後、佐藤龍彦・事務局長から、議案に沿って、活動報告・総括、方針・活動計画が報告・提案されました。会計の佐藤晴夫さんから会計報告・予算案提案がされました。今後の活動計画では、事故から13年経っても廃炉作業は遅々として進まず、課題が山積する一方で、政府・電力会社は原発再稼働を進め、とりわけ東電が柏崎・刈羽原発の再稼働の準備を進めて



いる中で、「守る会」として、医療費無料化、健康手帳交付、完全賠償を求める運動と、反核平和・脱原発・脱プルトニウムの運動を連動して前進しようとの提案がされました。振津アドバイザーからは、「10団体呼びかけ政府交渉」報告と、低線量被曝のリスクをより明らかにした「国際核施設労働者調査」(INWORKS)の解説と運動への活用について補足発言がありました。

新たに団体会員となった「津島地区福島原発事故の完全賠償を求める会」からの連帯の挨拶など、参加者の発言を受け、皆で次の一年の取り組みを確認し、紺野会長の音頭で「団結頑張ろう！」で締めくくりました。



事故から14年…父の姿に「奪われた」暮らしを思う

前田 潔

14年が経ち、いわき市で仕事・生活をしていると、懐かしさはありませんが日常に追われるので原発事故での避難が風化している気がします。自宅はまだ「帰還困難区域」で建物が残っていても用事がなければ一時帰宅をすることもありませんから、日常で避難者を意識する時は80歳半ばの父親が毎月「明日、大熊に行ってくるから」と一時帰宅を楽しみに大熊の自宅に行く姿を見る時です。70歳を過ぎて原発事故にあい、母が施設に入り一人での時間が多くなり、田畑を耕し兼業で働き苦労してきた父にとっては「奪われた」という感覚だと思います。事故前は「反原発」などという団体に「馬鹿な奴ら」という感覚の父でしたが、今は「反原発」です。

時間と共に風化していくことはある程度仕方がないことだと思いますが、原子力を扱うものが「想定外」で済ますものであってはいけなし、どんな状況でも防げないものならば止めるべきです。それでも、また原発回帰の提言がされていることに、「原発事故など無かった」と言われているように感じます。



然れど14年

坂口美日

私は、福島第一原子力発電所から西に直線で28キロほどの山あいにもつと立つ建つ、赤いトタン屋根の小さな家で生まれ育った。家の周りの野山が遊び場だった。このあたりまえの景観を失う日がこようとは、子ども時代には想像もつかなかった。が、「東電が事故を起こしたら、この山一帯に放射能が積もる、そしたら人間はここには住めなくなる」と聞かされたことがあり、「いつか、もしかしたら」という漠然とした不安を感じながら大人になった。

そして2011年3月11日、その不安は現実のものとなった。東京で働いていた私は、3月12日午後、自宅のテレビで、福島第一原発から発煙があったと報道されると同時に故郷の両親に電話し、すぐに東京に避難してくるよう促した。長年、原発建設反対運動に取り組んできた両親も、東電を全く信用していなかったのも話の即決。弟が車で途中まで迎えに行き、両親が東京に避難してきたのは、13日の朝だった。

あれから、14年も経ってしまった。両親は東京武蔵野市の6畳一間の都営アパートで、9年避難を続け、その間に母は蜘蛛膜下出血を患い、父は脳梗塞を起こした。その後、東京都が無償の提供をやめたことから、郡山で第二の避難暮らしを始めた矢先に父が亡くなり、母はいま三春の復興団地に暮らしている。

私は私で、音楽団体の役員をしていたことから、音楽仲間とともに国会前で事故の責任追及と脱原発を求めて歌うようになり、集会や行動での演奏依頼も多くなり、仕事との両立も困難になるぐらい忙しくなってしまった。そしてそれはいまでも続いている。あの事故さえなければ、こんなに忙しくなっていたはずと、心のどこかでいつも思っている。そして私は時々、ふるさとの家の夢を見る。すでに取り壊されて跡形も無くなってしまった、放射能のゴミとなってトラックで運ばれていった、ふるさとの家の夢を見る。

14年ひと昔、福島原発事故も昔の話、復興はこんなに進んでいると、連日の刷り込み報道ばかりが、特に3月11日が近づくと目につく。然れど14年。どんなに時が過ぎようが、上っ面だけ整えようが、あの事故によって奪われたもの、失ったものは元には戻らない。国と東電の大罪は、なくなるはずもない。



詩集『我が涙滂々』より

草茫々

小島カ

草茫々

田畑茫々

村一つ荒れ果てて茫々

二年前

玉蜀黍畑を風が渡り

大根の葉先に朝露が鈴生りの

その畑に

ささやかな豊かさに満ちた

その山畑に



草茫々

野道茫々

萬かざら絡みあつて茫々

幾年月

牛を牽き 耕運機往き来し

何千回何万回の足跡を印した

その道に

暮らしの汗したたり

地に滲みた

その畦道に

草茫々

我が家茫々

軒先を埋め尽くして茫々

かつての昔

子たち孫たちの歓声はね返り

バーベキューの焚き火燃え盛った

その庭に

生きて暮らした思い出消えやらぬ

その庭先に

今は只・・・

草茫々

ふるさと茫々

わが涙滂々

草茫々

何もかも亡々

悔し涙滂々

滂々

滂々

滂々

滂々



本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会 会長 紺野 則夫

皆様におかれましては、よき新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

さて、昨年今頃は能登半島地震による甚大な被害により騒然としており、連日の TV、マスコミ報道に心穏やかでない日々が続きました。更には豪雨災害と、幾重もの困難に遭って今も生活再建途上にある日々の暮らし、自らの体験に重ねて熱い思いが走ります。あらためて被災者の皆さまに心よりお見舞い申し上げます。巨大地震による断層の亀裂や隆起、津波による景観は、私たちが14年前に経験した以上であり、仮に原発が震源地の珠州市(原発建設を白紙撤回)に建てられていたら、志賀原発が動いていたらと思うと背筋が凍るようです。

東日本大震災・原発事故発生から14年目になります。福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会結成から3年目を迎えています。会は、避難地域の医療費無料化特別措置の継続と健康手帳の交付、完全賠償の要求解決に向けて、政府との交渉等、諸とりくみを行なっています。また、事故当初から国の過小評価や不安解消への矮小化、被害の風評限定及び「風評加害」への捏造、賠償金の格差による分断によって、物言えぬ被害者の受け皿となれば幸いです。新春にあたり決意もあらたにして前進します。

国と東京電力は、人々の「いのち」「くらし」よりも経済(資本の利益)が大事、何千人もの死者、健康被害を犠牲にしても、形式化した安全を枕詞に原発推進、核燃料サイクルを進めています。政府の第7次エネルギー基本計画では、福島事故の反省と教訓が導いた「原発依存度の低減」を撤回し、最大限活用方針を基に原発再稼働、建て替え、次世代型原発の新設を示しています。能登半島地震の知見も無視し、新潟・柏崎刈羽原発の再稼働に政官財学一体となって進める姿勢は異常としか言いようがありません。

福島民報1月15日2面論説欄でも警鐘を鳴らしています。(エネルギー計画案「事故の教訓忘れるな」を題字に、基本計画は低減する方針を削除／脱原発路線を転換し原発回帰にかじを切った／再稼働への地元同意／使用済み核燃料棒の処分／軍事的標的／避難生活の継続／政府の事業見直し論／不透明な廃炉や除染土壌の最終処分／の現状にもかかわらず、原発推進の太旗を再び掲げる政府の姿勢に疑問を投げかけ、意見公募提出を呼びかけています。)加えて私たちは以下の意見を述べます。事故を起こした国、東京電力の加害責任と法及び倫理感、今だ不明な事故検証と緊急事態宣言下、いのちとくらし、けんこうを奪いつづけている犯罪(社会的殺人)等・東京電力や国に原発を動かす資格はありません。また被災県である福島県知事は静観を決めて「国の責任で・・・」と無関係な態度を装っています。

健康と暮らしを守る会の課題追求と脱原発のたたかいは不離一体です。誰もが被害者です。会の趣旨・目的に賛同し会員になってください。

本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

2025年1月 新春



全国署名ご協力を！政府交渉にもご参加ください！

医療費無料化継続、「健康手帳」交付等を求め、全国署名を積み上げ、全国10の呼びかけ団体の皆さんと共に、引き続き対政府交渉にも取り組みます。(次回5月末～6月頃を予定。日程が決まり次第お知らせします。)福島県被災地での「話し合い」(公聴会)開催も省庁に求めます。

会員・サポーター募集！(入会ご希望の方は会費振込時に通信欄にご記入ください)

*会員：福島原発事故被害地域住民・避難者、及び団体の方々

年会費：個人(一口1000円)、団体(一口5000円)

*サポーター：全国の方々

個人(一口1000円)、団体(一口5000円)

会費・カンパの振込先：郵便振替：02200-5-129891

加入者名：福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会



会報発行：福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会

事務局連絡先：福島県双葉郡楢葉町大字下小埦字広畑54番地 佐藤龍彦

電話・Fax：0240-23-4019 携帯：090-2274-6844

ホームページ：<https://mamorukai1001.jp.org/>